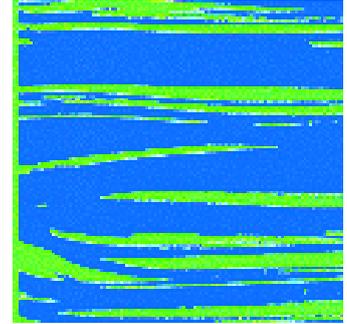


# 日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2006年 夏号 No. 43 (2006年8月25日発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

理事長に就任して .....	藤 健一
第24回年次大会へのご参加を歓迎します .....	第24回年次大会実行委員会一同
2006年 ABA 参加学生助成事業 .....	杉山尚子
ABA 体験記 (1): 行動分析づくりの刺激的な5日間 .....	大対香奈子
ABA 体験記 (2): アっという間の一週間 .....	中村道子
学会情報 .....	藤 健一

---

## 理事長に就任して

藤 健一

立秋が過ぎても、ここ京都では日中は35を超える毎日です。行動分析学会の会員の皆様は、如何お過ごしでしょうか。さて、小生は先の理事長選挙の結果、今期の理事長に選出されました。小生にとっては、まさに晴天の霹靂ともいべき出来事でした。しかしながら、いろいろと逡巡し時間をかけ、この任期の3年間に行動分析学会と行動分析学の興隆を図るためにできることは何であろうかと考え、今も考えております。

一つめは、行動分析学会の学術研究の一層の活性化と普及と連携とを追究したいと思います。二つめは、日本行動分析学会および日本の行動分析学の学問的・学術的蓄積を、だれもがいつでも有効に利用できるような環境をさらに整えたいと思います。三つめは、学会運営および会員

へのサービスのあり方を検討する時期に来ているのではないかと考えております。

一つめの課題は、機関誌「行動分析学研究」の定期刊行の回復と、学会の企画する各種の出版計画立案と、その実行です。「行動分析学研究」の定期刊行については、関係委員会の尋常ならざる努力にもかかわらず、残念ながら刊行の遅れが生じております。定期刊行物の発行の遅延は、いろいろな方面に影響の出る事柄であり、初年度(2006年度)中には、是非とも回復させたいと思います。また、各種の出版計画については、今まで余り刊行される機会がなかったような分野や、今までの行動分析学会の蓄積した学術研究を再利用しやすいような出版企画をも検討しています。さらに、近年の諸学問および諸学会の関係も、離れたり重なったりと非常に

複雑な様相を呈しています。会員の皆様も、いくつもの学会に所属して研究と教育、実践とに邁進されていることと思います。こういった昨今の状況から、学会主催・共催・後援を含む多様な形態のシンポジウムの開催や、関連する諸学会との緩い連携は、今まで以上に重要になるのではないかと思います。

二つめの課題は、前述した出版企画以外にも、昨今のインターネット環境の下での学術論文の利用に関する事柄です。現在、各学会の各種の学術論文はフルテキスト参照が可能となってきました。「行動分析学研究」および「行動分析学会大会論文集」も国立情報学研究所の電子図書館サービスに加入以来、参照が可能となっていますが、これの会員の皆様への広報と周知とを、さらに進めたいと思います。

三つめの課題は、会員数の増加にとともに、関連する事務的諸業務が増大しつつあります。従来の学会事務局のある研究室総掛かりでこれにあたるという方式では、増える作業量をこなしていくことは困難となります。以前より常任理事会などにおいて、他の学会事務局を参考にしながら事務業務の外注化の検討の必要性が指摘

されておりましたが、これの可能性についての検討を始めたいと思います。

今期の理事会は、次の理事の方々です(50音順)。浅野俊夫、伊藤正人、井上雅彦、大河内浩人、小野浩一、鎌倉やよい、河嶋孝、坂上貴之、島宗理、杉山尚子、園山繁樹、中野良顯、中島定彦、野呂文行、松見淳子、真邊一近、武藤崇、望月昭、望月要。

また、各委員会(主務とする常任理事)は、次のとおりです。機関誌編集委員会(真邊一近)、出版企画委員会(伊藤正人・望月昭・井上雅彦)、研究教育推進委員会(浅野俊夫・島宗理)、国際・渉外委員会(杉山尚子)、倫理委員会(中島定彦)、広報委員会(望月要)、事務局(武藤崇)。

今期の理事会と各種委員会は発足したばかりであり、また新事務局も漸く事務作業に慣れ始めました。これからは、会員の皆様のご支援をいただきながら、今期理事会は切磋琢磨を重ねて、任務を全う致したいと存じます。来る9月の関西学院大学での第24回大会において会員の皆様とお目にかかることを、心待ちに致しております。

## 第 24 回年次大会へのご参加を歓迎します

### 第 24 回年次大会実行委員会一同

日本行動分析学会第 24 回年次大会は、2006 年 9 月 1 日(金)~3 日(日)に関西学院大学上ヶ原キャンパス(兵庫県西宮市)で開催されます。先日、会員の皆様に第 24 回年次大会の発表論文集を発送いたしました。万が一、発表論文集がお手元に届いていない場合は、大会実行委員会(Fax:0798-52-7353、URL: <http://www.dips-kwansei.gr.jp/j-aba2006>)までお知らせ下さい。

大会における諸行事の詳細は発表論文集に掲載してありますが、講演 3 件(うち 2 件は無料

一般公開)、シンポジウム 4 件(うち 1 件は無料一般公開)、口頭発表 17 件、ポスター発表 90 件、会務総会・授与式、役員会が予定されています。

### 大会参加費および懇親会費について

約 200 名の方から大会参加費の予約申込(前納割引での参加費納入)がありました。当日参加費は会員・非会員ともに 5,000 円(大学院生は 4,000 円、学部生は 1,000 円)となっています。学部生の参加費を低額に抑えてありますので、

近隣の大学の先生方はぜひ学部生に参加をお勧め下さい。ゼミ旅行などの形式による遠方からの集団でのお越しも歓迎します。

2日目(9/2)の夜に開催される懇親会の前納申込みも終了しています。会期中にお申込みいただく場合は6,000円(大学院生・学部生4,000円)となります。200名参加できる会場を用意してありますが、既に約100名の申込みがありますので、会期が始まりましたらすぐに大会会場受付にてお申込み下さい(定員を超過した場合、懇親会のご参加をお断りすることになります)。

なお、参加費・懇親会費とも前納いただいた方については、名簿を実行委員会で作成しておりますので、当日は予約参加者受付にお越し下さい。お支払いに利用された郵便局の「払込取扱票」右側の「払込請求書兼受領書」をもって受領証とします(大会実行委員会より別途、受領証をご送付することはありません)。なお、大会当日、受付にてお渡しする参加章の裏面が領収書となっています。

#### 会場へのアクセスと宿泊

大阪梅田または神戸三宮から所要時間約25分(乗換時間を含む)のところに会場となる関西学院大学上ヶ原キャンパスの最寄駅(阪急今津線甲東園駅)があります。最寄駅から会場までは約15分です。詳しくは、発表論文集をご覧ください。

宿泊施設の斡旋は致しません(提携料金は一般料金よりも高くなる場合がありますので、今大会では提携宿泊施設をご用意しておりません)。お手数ですが、宿泊予約は各自をお願いします。大会ウェブページに宿泊・旅行関係のサイトを掲載していますのでご覧ください。なお、会場に近いホテルは、以下の通りです。宝塚ホテル(TEL:0797-85-2602)、宝塚ワシントンホテル(TEL:0797-87-1771)、ホテル若水(TEL:0797-86-0151)、宝塚イン(TEL:0797-86-4101)、千

八旅館(TEL:0798-67-6503)、ホテル中寿美花壇(TEL:0798-74-6121)。

阪急梅田駅(大阪市北区)あるいは阪急三宮駅(神戸市中央区)から会場の最寄駅までは約25分(260円:西宮北口駅での乗換時間を含む)です。キャンパスまでの合計時間も約40分ですので、梅田や三宮にたくさんある格安ホテルに宿泊されると経済的です。

#### その他

1. 本大会では所定の発表日以外の日にもポスターを掲示できます。初日(9/1)の午後1時半から最終日(9/3)の午後4時まで、会期中連続してポスターを掲示することが可能です。

2. 託児室の利用料金は1,000円(子ども1名、1日あたり)です。大会ウェブページをご覧ください。8月15日(必着)までにお申込み下さい。

3. 日本行動分析学会研究教育委員会の委託を受け、論文交換の場をご用意します。紹介したい自著論文の抜刷(またはコピー)を1部ご持参下さい。詳しくは、発表論文集をご覧ください。

4. 大会を記念して、一般市民向けに、特別支援教育に関するワークショップ(行動分析学の基礎知識に関する講演と個別相談会)を、最終日(9/3)に大会と並行開催します(参加費1,500円)。関西近郊の保護者の方および保育士・教職員の方を対象としています。行動分析学会会員の方は、宣伝にご協力いただくと幸いです。詳しくは大会ウェブページをご覧ください。

#### むすびに

本大会は酷暑の中開催されることとなります。皆様には、くれぐれもご健康にご留意下さい。なお、8月13~21日は関西学院大学の盛夏休暇期間のため、郵便物の受付が停止します。実行委員会へのご連絡はできるだけ、メールまたはFAXにてお願いします(ただし、8月16日は実行委員会事務局がおかれている建物が停電のためFAXも不通となります)。

## 2006 年 ABA 参加学生助成事業 山脇学園短期大学 / 国際担当常任理事 杉山尚子

本会設立 20 年記念事業費の残額ならびに雑誌バックナンバーの売り上げを基金に、2002 年度、小野浩一理事長の時代にはじまった標題の事業も今年で 4 年目を迎えた。お陰様で 4 年間にわたり、8 大学 9 名の推薦者によって 16 名の学生諸君の応募を得、定着してきている（表 1）。これまでの当選者が寄稿した J-ABA ニュース上の報告記を見れば明らかなように、この制度があったればこそ、ABA に参加できたという学生諸君の声も少なくない。

本年 5 月末にアトランタで開催された ABA2006 年次大会の最終日、すべてのセッションが終了した早い午後、会場となったホテルのバーで、アトランタの地ビール Peach Tree Ale を飲んでしていると、飛行機の時間待ちをしているさまざまな研究者がやってきて（中には初対面の方もいた）四方山話がはずんだ。最後にやって来たのは、今年度まで ABA の理事会メンバー

(At-Large Representative) であったウェスタン・ミシガン大学のマロット教授で、いつものように行動分析の普及と学生支援に花が咲いたが、やり取りの中で、ABA の理事会が j-ABA のこの制度を高く評価していることを知った。

内外からの期待あればこそ、いっそうこの制度は今後も続けていきたいが、何分にも会には十分な予算がない。自助努力として、2006 年度の SABA の International Development Grant に応募したり、何らかの事業収入で制度存続をはかることを考えているが、会員の皆様にも、この制度の存続を支援していただくことを願う。

この制度によって、今年度アトランタ大会に参加した、大対香奈子さん（関西学院大学）、中村道子さん（駒澤大学）の報告記をご覧になり、制度存続の秘策を考えていただければ幸いです。

表 1 . 学生会員 ABA 参加助成金応募者（印は授与者）

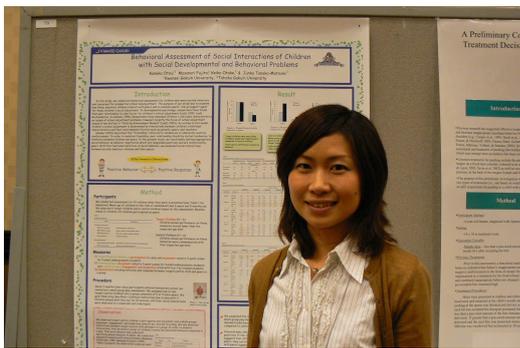
募集年度	参加年 / 大会	応募数	応募者	推薦者
2002	2003 年 / サンフランシスコ	3	尾関 唯未（名古屋大学）	浅野みどり
			正木 一喜（大阪市立大学）	伊藤正人
			菅佐原 洋（慶應義塾大学）	山本淳一
2003	2004 年 / ボストン	5	加藤 明子（上智大学）	中野良顯
			松井 進（常磐大学）	森山哲美
			大石有里子（上智大学）	中野良顯
			櫻尾 麻里（上智大学）	中野良顯
			岸本あゆみ（上智大学）	中野良顯
2004	2005 年 / シカゴ	4	桑原 正修（大阪教育大学）	大河内浩人
			佐々木まり（上智大学）	中野良顯
			菅佐原 洋（慶應義塾大学）	山本淳一
			道城 裕貴（関西学院大学）	松見淳子
2005	2006 年 / アトランタ	4	大対香奈子（関西学院大学）	松見淳子
			中村 道子（駒澤大学）	小野浩一
			丹野 貴行（慶應義塾大学）	坂上貴之
			藤田 昌也（関西学院大学）	松見淳子

## ABA 体験記 (1): 行動分析づくしの刺激的な 5 日間

関西学院大学大学院博士課程後期課程 3 年 / 大対香奈子

今年 5 月 26 日から 30 日にかけてアトランタで開催された第 32 回 ABA 年次大会に参加してきました。今回の大会は、私にとっては昨年のシカゴでの大会に続き 2 回目の参加でした。昨年初めて参加したときに感じた刺激や興奮があまりにも強く、今回の迷わずの参加はその強化の結果であったと思います。そして大きな期待を胸に参加した今回の大会でも、その期待を上回る刺激を受け収穫の多い大会でした。

ABA に参加する醍醐味は、何と言っても本や論文の中でしか出会えなかった憧れの研究者を目の前にして講演が聞けるということです。また、私は国際学会に参加する時には、直接自分の研究領域に関係ないことであっても、著名な研究者の講演やその時々話題になっているテーマの発表はできるだけ出向いて聴くようにしているので、今回もそのスタイルで参加しました。



ABA のプログラムには、最新の研究発表はもちろんのこと、行動分析学の入門者向けの Tutorial や、どちらかと言うと上級者向けの行動分析の理論について議論する Theory という発表カテゴリーもあり、参加者の層の厚さを感じます。発表のテーマも多種多様なものがそろっているので、その中から 5 日間という限られた時間に聴く発表を決めるというのは至難の業で

す。行きの飛行機の中では、長時間プログラムとにらめっこしていました。悩みに悩んだ末、私の参加したプログラムを一部ですが簡単に紹介します。Tutorial では David C. Palmer 教授の “The Extension of Skinner’s Verbal Operants to Interpretations of Complex Behavior: A Tutorial” を聴きました。Verbal Behavior という少し「難解なもの」というイメージがありますが、Palmer 教授はたくさんの例を挙げながら、特にイントラバーバルとオートクリティックについてお話をしていました。入門者にも分かりやすく、また会場では笑いが何度も起きる楽しいお話でした。Theory では John W. Donahoe 教授の “The End of Experimental Analysis?” という発表を聞きました。ニューロサイエンスの視点からの興味深いお話でした。また、Jack Michael 教授、David C. Palmer 教授、Mark L. Sundberg 教授、Janet S. Twyman 博士という豪華なメンバーでのパネルディスカッションでは “The Analysis of Complex Human Behavior” というテーマでの議論が繰り広げられました。複雑行動をどのように捉え、研究していくか、その研究の意義とは何か、ということについてオープンに意見を交わすパネルディスカッションでした。最近話題のテーマでは、Steven Hayes 教授の Acceptance and Commitment Therapy の発表や、George Sugai 教授の Positive Behavior Supports の発表、Kent Johnson 教授の Precision Teaching の発表などを聞きました。どれも精力的に応用行動分析を用いた介入と研究が展開されていることを象徴するような発表でした。Brian A. Iwata 教授の “On Extinction” という発表は、ものすごい数の立ち見が出るほど大盛況でした。発表は現場での消去手続きが有効に働かない理由と、より有効な問題行動低減のための手続きに

ついでの内容でした。どの発表もとても刺激的で、同時にまだまだ勉強すべきことが山積みだと実感し、今後の研究へのモチベーションが高められました。

あまりの興奮に自分の発表を忘れてしまいそうになっていましたが、私のポスター発表は“Behavioral Assessment of Social Interactions of Children with Social Developmental and Behavioral Problems”というタイトルで 29 日に行いました。私の研究は、健常児の社会性発達と学校適応を大きなテーマとして、発達心理学の領域で多くされているような研究を行動分析的な視点を取り入れながら行っています。今回発表した研究はその一部ですが、発達心理学と行動分析学の間片足ずつ突っ込んだような研究なので、ABA で発表されているものの中でもメジャーな領域からは外れてしまいます。それでも、たくさんの方が質問に来てくださり、発表を無事に終えることができました。今回のポスター発表でいただいたご意見を参考にしながら、将来的には両領域を結ぶ架け橋となるような研究に発展できればと思っています。ABA には、Gary Novak 教授や Martha Pelaez 教授などが現在中心となり、行動分析学の立場から発達心理の研究を行っている研究者がいます。今年の大

会では記憶研究で著名な Elizabeth Loftus 教授を招いて特別講演を実施するなど、ABA は行動分析が科学として他の領域との間にどのような相互作用を作り出せるのかということに積極的に意識して進めているように感じました。

ABA は研究発表や講演だけではなく、その他にもソーシャルなイベントが用意されています。その一つが 28 日の夜に開かれた ABA Expo でした。ポスター発表と同じようにして様々な大学や各国の行動分析学会、研究グループなどがブースを設け、情報交換をするというまさに交流が目的の催しです。日本行動分析学会のブースには、アメリカの大学院で行動分析を勉強されている日本人の学生さんが来られて、いろいろなお話をすることができました。また、全米各地の大学にある行動分析のプログラムについても知ることができ、その大学の先生方とも直接お話ができるので、アメリカへ留学を考えているような方にとっては、絶好の情報収集の場であると思いました。

最後になりましたが、このたび日本行動分析学会の助成を受けて、このように貴重で有意義な体験ができましたことを心より感謝いたします。ありがとうございました。

## ABA 体験記 (2): アっという間の一週間

駒澤大学大学院博士課程 1 年 / 中村道子

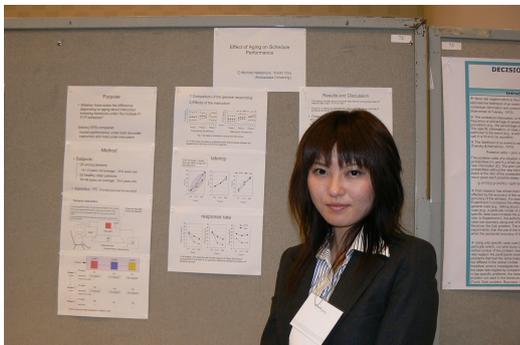
アトランタで開催された第 32 回国際行動分析学会で発表して参りました。初 ABA、初アメリカと何もかもが私にとって初めての体験で、出国前からドキドキの連続でした。

まず、大会プログラムを手にした時、その厚さに驚きました。こんなにも多くの発表があるのかと。出国前から、「どの発表を聞きにいこうか?」「同じ時間帯に聞きたい発表が重なってし

まったが、どちらにいこうか?」など頭を捻っていました。ABA のプログラムは“迷える喜び”でいっぱいでした。そんなドキドキを胸に秘めながらアメリカに渡った私は、更なる胸の高鳴りを経験することになりました。

私のポスター発表は大会 3 日目の正午でした。“Effect of Aging on Schedule Performance”という題で、教示に従う行動が加齢に伴いどのよう

に変化するのかを検討した研究を発表しました。高齢者を対象とした実験的行動分析の研究は非常に少なく、発表する前までは数人しか聞きに来ては下さらないだろうと思っていましたが、この予測は嬉しい誤算になりました。多数の方が私の拙い英語に熱心に耳を傾けて下さり、有益な助言を下さいました。「手続きを少し変えてスケジュール感受性をみるのはどうか?」「ラットでもみられる時間間隔における加齢の効果をヒトで検討してみてもどうか?」などの助言に関してディスカッションをし、発表終了時には顎が痛くなるくらい喋り通しの1時間半でした。様々な方とのディスカッションを通じて、論文を単に読むだけでなく、その内容を理解しディスカッションをすることの重要性を改めて実感することが出来ました。



更に、私が参加したヒトの実験的行動分析に関するペーパー・セッションや講演では、研究史から最近の研究動向を聞くことが出来ました。大会当初は、発表内容があまり理解できずスライドを見て理解するという感じでしたが、英語に慣れてくるにつれて口頭の発表内容も徐々に理解できるようになりました。時が経つのが早く、どのセッションでもあっという間でした。1つのセッションを聞き終わると、すぐ別の部屋に移動し次のセッションを聞く、という感じで1日中慌しく会場を駆け回っていました。これ

も、魅力的な発表が目白押しのABAの特徴ではないか?と思いました。

私がABAに参加してよかったと思ったことが2点あります。1点目は、論文上でしか知らない方々と生で対話ができるということです。私は今回のABAで始めてCatania先生とお会いすることができ感激でした。また、Heward先生夫妻ともJ-ABAでお会いして以来、約10ヶ月ぶりの再会でした。2点目は、今後の研究活動に大きな自信がついたことです。私の発表を聞きに来て下さった方々からヒトやラットの加齢に関する行動分析学的研究における知識を沢山得ることが出来ました。さらに、Neuringer先生からは、ラットの変動性における加齢の効果を検討した論文を送って頂きました。これからABAでの貴重な経験を生かし研究を進めていきたいと考えています。

最後に、このような貴重な経験が出来たのもJ-ABAの助成金制度や諸先生方のおかげだと思います。杉山先生には渡航に関してやルームシェアの手配等のお世話をして頂きました。小野先生やゼミの仲間にはポスターや発表準備に関して多くの助言をして頂きました。鶴巻先生にはルームシェアをして頂きました。私が無事にABAで発表することが出来たのも、多くの方々がサポートして下さいたからだと思います。この場をお借りして感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。また、まだABAへ参加したことの無い学生の方々には是非この助成金制度に応募し、ABAを自分の体で体験して欲しいと思います。私も現地で自分の英語力のなさを実感し、何を質問されたかは分かるけどうまく伝えられないという歯痒さを感じました。しかし、日本では味わえない経験が必ずできると思います。少しの勇気とポスター片手にABAに参加してみてもいいかがですか?

## 学会情報

理事長 藤 健一

### 1. 2006 年度理事会、常任理事会について

2006 年度の理事会と常任理事会は、それぞれ順に 5 月 21 日と 7 月 15 日に第 1 回が開催されました。今後も、これらの会議はおよそ 2 ヶ月に 1 度のペースで開催される予定です。また 9 月 2 日（第 24 回年次大会機関中）には総会を予定しております。ご多忙とは存じますが、万障お繰り合わせのうえ、ご参加下さいますようお願いいたします。

### 2. 会員数

2005 年 8 月 18 日現在の会員数は 771 名（一般 564 名、夫婦 7 名、学生 195 名、購読 5 名）です。毎月 5 名程度ずつ増えておりますので、来年度までには 800 名に達するものと予想されます。

### 3. 2006 年度会費納入のご案内

2006 年度の会費納入率は 2006 年 8 月 18 日現在で 43.765 皆様の会費によって支えられておりますので、お振込がお済みで無い方は、下記の口座までお早めにご納入くださいますようお願いいたします。

会 費：一般 7000 円、学生・夫婦 4000 円、  
購読 8000 円  
振込先：郵便局 00120-2-352016

日本行動分析学会

なお学生会員の方に提出していただく、在学証明書もしくは学生証のコピーは、毎年必要となります。ご提出いただけなかった場合には、一般会員としての会費をお振込いただくことになります。

### 4. 機関紙の発行

「行動分析学研究」第 20 巻 1 号は、近日発刊予定です。住所の変更を予定されている方は、後述の事務局連絡先までお知らせ下さい。

### 5. 事務局連絡先

学会事務局では、新入会員のお申し込みや会員登録内容の変更などを、郵送のほか、電子メールや FAX にて承っております。また、学会に関するご質問等も事務局にてお伺いしておりますので、何かございましたら下記までご連絡下さい。

郵 送：〒 603-8577 京都市北区等持  
院北町 56-1 立命館大学文学部心理学  
研究室内  
F A X：075-465-7882  
メール：j-aba.office@j-aba.jp

## 編集後記

今回の第 43 号からニューズタレーの編集をすることになりまた望月@帝京大学です。表紙用紙の手配が遅れ、担当初回から刊行時期が大幅に遅くなってしまいました。早くから原稿をお寄せ下さった執筆者の方々、会員の皆様に御迷惑をおかけ致しました。ニューズレターの電子化、学会ウェブ・サイトの充実など、広報委員会に載っている多くの期待にお応えできるよう

頑張ります。今後とも宜しく御支援の程お願い申し上げます。

192-0395 八王子市 大塚 359  
帝京大学文学部心理学科内  
日本行動分析学会ニューズレター編集部  
望月 要  
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp